

美術と福祉の多視点による障害者の芸術作品の展示に関する研究 —発展期における新たなアーカイブ作成—

市立小樽美術館 学芸員（助成時）

同上（現 在）

山田 菜月

研究の目的

障害者の芸術活動が、新しい芸術のジャンルとして注目されている。東京オリンピック・パラリンピックの開催や、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」（通称：障害者文化芸術推進法）の成立に際し、その作品が多くの人々の目に触れる機会も増加した。福祉施設や自宅で生み出されてきた作品の持つパワーが、当事者だけではなく社会全体に影響を与えるという考え方が、機軸を持ち始めている。

一方、障害者による作品を美術としてどう扱うかは模索されている段階であり、美術と福祉の境界は非常に曖昧である。例えばその名称についても、「アールブリュット」「アウトサイダー・アート」「ボーダーレス・アート」「障害者アート」など、個人の考えや文脈によって統一がされていない。トップダウン的な拡散の一方で、いまだに人材育成や環境整備が不足しているなど、急速な発展の中で問題の積み残しは多い。

北海道内では、公立美術館などで障害者のアートを取り扱う展覧会は増えてきているものの、その多くが巡回展や貸し館形式の開催に止まっている。美術館学芸員が継続的に研究し、その成果として展覧会を開催する例は少ない。その背景には、美術館として障害者の作品を扱う難しさや、新しいジャンルに対しての学芸員の継続的な研究の難しさなどがあると考えられる。

本研究では、北海道アールブリュットネットワーク協議会の事務局として障害者による芸術活動の推進を担ってきた壽崎琴音氏（社会福祉法人ゆうゆう学芸員）と、美術と福祉の視点を持った共同研究である。北海道内では積極的に行われてこなかった「障害者の芸術活動」についての大規模な調査を行い、障害者の美術作品とその展示について、美術と福祉、理論と実践の両方向から見つめ、より実践的な研究を行った。

研究内容と結果

(1) 先行研究、前例調査

まずはじめに、国内でも障害者の芸術活動において常に先駆的な活動している滋賀県で調査を行った。障害者による美術作品の実践的な展示方法を調査するため、ボーダーレス・アートミュージアム NO-MA、やまなみ工房、滋賀県立美術館、そして京都府の art space co-jin を見学した。

実際に最前線で活躍している施設の職員から、ヒアリングを行ったことで、その後の調査をスムーズに進めることができた。

(2) 道内作品調査研究

広大な北海道においては、作業所などの障害者による芸術活動の現場が点在しているため、全道を対象とした作品調査は非常に困難であった。

本研究では、施設の感染症対策や、研究費との相対的な兼ね合いにより、より遠い施設を中心に、21施設を訪問・調査し、318名の作家・作品のアーカイブ化を行った。なお、本研究で訪問できなかった道内の他施設については、令和5年度も引き続き調査を行い、アーカイブを充実させていく予定である。

表：本研究による調査箇所と調査人数の一覧

	胆振方面	北見方面	静内方面	道東方面	旭川方面	函館方面	遠軽方面	合計
施設(ヶ所)	1	1	6	2	4	6	1	21
作家(名)	29	28	61	74	72	28	26	321

(3) アーカイブ整理・研究

調査した作家・作品は、地域や技法(表現方法)だけでなく、ヒアリングを行い、アーカイブ化した。予想以上に多数の未調査の作家や作品を調査することができたため、当初の予定よりも調査項目を簡易的なものにし、道内の広い範囲を網羅することを重点とした。これを基礎調査とすることにより、今後予想される多くの展覧会や研究の発展の契機となることが予想される、ボリュームのあるアーカイブとなった。

研究の活用

この研究の成果を元に展覧会を企画し、来年度に市立小樽美術館で特別展「障害のある人と、アーティストと、私たち 表現するということ」を開催予定である。本展では、これまで自由で多様な価値を持つ創造的なアートとして注目されることの多かった障害者による芸術活動について、その根底にある「表現したい」という欲求にスポットを当てる。このテーマは、本研究を遂行する上で、「表現する」という、内面的なものを形にし伝達することは、障害の有無にかかわらず、プロのアーティストであろうと私たちであろうと、同様の普遍性を強く感じたことに起因する。この福祉的かつ美術的なテーマを、多くの人考える機会となることを願っている。

図1：やまなみ工房での調査の様子



図2：調査作品



図3：調査作品

